

あとがき

専修大学スポーツ研究所 所長

佐藤 満

◆スポーツは楽しい

5年ぶりとなるWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）では、日本が3回目の優勝を達成、MVPは大谷翔平選手が受賞した。彼が発した「憧れるのをやめましょう」は今も色あせることなく人々の記憶に刻まれている。その後の大リーグにおいても投打の二刀流で大活躍し、ホームラン王のタイトルと2回目のMVPに満票で選ばれた。4年に1度のラグビーワールドカップでは、ラグビー日本代表は準々決勝に進出する上位2チームに残れず大会を終えた。女子サッカーは準々決勝で日本はスウェーデンに敗れ、ベスト4進出はならなかった。男子バスケットボールは、17-32位決定戦でカーポベルデと対戦し80-71で逃げ切り、目標としていたアジア1位（大会結果19位）となり2024パリオリンピックの出場を決めた。2年に1度の世界陸上では、女子やり投げの北口榛花選手が日本女子初となる優勝を成し遂げた。世界水泳ではアーティスティックスイミング（シンクロ）の活躍はあったが、競泳陣は惨敗といわれた。2023年も挙げればキリがないほどの数多くのスポーツ大会が開催され、人々に勇気と感動を与えてくれた。スポーツはどちらか勝つか分からない緊張感や逆転劇が起こる可能性があり、同じ瞬間を感情や興奮で共有し、多くの観客を引き込む。それぞれのスポーツファンが異なる要素に魅了され、広く楽しみを見出しているからこそスポーツは楽しい。

「スポーツには勝負はつきもの」であるが、チームであれ個人であれアスリートたちは自身の能力や戦術を駆使して成長を続けて相手に勝利し、目標を達成することを目指している。日本のトップアスリートたちは私の現役時代と比較すると、幼少期から専門的に取り組んで順調に成長している選手が多く見られる。競技種目にもよるが、その中で陸上女子やり投げの北口選手は競泳、バドミントンでの活躍から、高校からやり投げを始めて世界一になった。現在の日本スポーツはさまざまな競技が世界レベルにおいて大変目覚ましい活躍で嬉しく思うが、各トップアスリートの成長過程がさまざまなスポーツを楽しむながら生まれることを期待している。そ

れは他競技から学ぶことが多々あり、アスリートの競技力向上はもちろん、人間的成長にも繋がるからである。そしてそれぞれのスポーツに理解を示すことから、スポーツ文化が根付き生まれ、スポーツの価値がさらに高まると思うからである。

◆スポーツにおける「出会い」と「縁」「繋がり」

長年スポーツに関わってきた過去を振り返ると、最近は特にスポーツにおける「縁」と「繋がり」を強く感じる。それぞれのスポーツを通じた「出会い」から仲間同士を繋げ、共通の目標を持ち、共有される経験や困難を乗り越えてきた過程は、強い協力関係を築き、絆が深まり、そこからたくさんの「縁」と「繋がり」が生まれている。

選手時代の「出会い」は今でも強く感じるのももちろんだが、引退後の指導者としての活動は、専門種目や所属を超えて自治体、各スポーツ組織など全国各地からの講演会やトレーニング指導などでの「出会い」が間違いなく私自身を成長させてくれた。その競技の一流と言われる方々にお会いし、気付かせて頂いたことがたくさんあった。自分の知らない広い世界で多くの方々と出会ったということは、それだけで自分にとって大きなプラスと感じている。

最近はその「出会い」から多くのスポーツをテレビ観戦しながら楽しんでいる。2012年大谷翔平選手は入団の可能性「ゼロ」から日本ハムに入団した。当時の私はロンドンオリンピック金メダル獲得の強化に長年取り組んでおり、他競技はほとんど観戦する余裕もなく、恥ずかしながら大谷選手情報は高校野球で凄い選手がいる程度の知識しかなかった。当時、日本ハムスカウトディレクターだった大淵隆さんをはじめ数名の方々から日本と海外、特にアメリカスポーツにおいてのメリットデメリットを教えて欲しいと言われて、その会合に参加した。大谷選手と入団交渉した際に提示した資料「夢への道しるべ〜日本スポーツにおける若年期海外進出の考察〜」はその会合の一つであり、その資料作成協力者として自分の名前が記載されてい

ると知人から聞かされ驚いた。私はその「縁」から彼のファンとして、現在のスーパーな活躍や人間的にも謙虚で礼儀正しい振舞い、努力と挑戦する姿勢に対して、尊敬と「繋がり」を感じながら彼の活躍を楽しんでいる。

日本代表森保一監督が選手時代、母校の先輩後輩がマツダサッカー部トレーナーをしている関係から講演させて頂いたことがある。後輩からはその際の話が森保監督にとって大変刺激になったと聞いた。私がサッカーS級コーチ講習会講師時には、齊藤俊秀コーチ（当時藤枝MYFC監督兼選手）が参加し、講習会時に学んだトレーニングを取り入れたいと話してくれた。その二人が指導者としてピッチに並んで指導している姿を見てだけで嬉しく思う。自分勝手ながら「繋がり」を持って、感慨深く日本代表を応援している。この原稿を書いている期間中にアジア杯準々決勝で日本はイランに逆転負け、2試合分の楽しみが消えてしまった。

これまでも水泳、柔道、卓球、ラグビー、ハンドボール、バレーなど数多くの団体・個人に関わった多くの「出会い」があり、「縁」と「繋がり」を感じている。そしてテレビやネットなどで活躍している姿を観戦して応援する自分がおり、今まで多くのスポーツに関わったことに感謝している。まだしばらくはスポーツオタクから抜け出せない自分がそこにいる。いや、一生続くであろう。その心理はチームや選手を応援するファンも同様であり、試合における勝敗、逆転劇など一喜一憂し、興奮や誇りが共有される。その懸命なアスリートのプレーは多くの人々に勇気と感動を与え、ファンとチームや選手は繋がり、まさしく「スポーツのチカラ」である。

第2期スポーツ基本計画の「する」「みる」「ささえる」から第3期計画ではオリンピック・パラリンピックのレガシーの発展に加え、新たな3つの視点として、

- ①社会の変化や状況に応じて、既存の仕組みにとらわれずに柔軟に対応するというスポーツを「つくる／はぐくむ」という視点
- ②さまざまな立場・背景・特性を有した人・組織が「あつまり」、「ともに」活動し、「つながり」を感じながらスポーツに取り組み

る社会の実現を目指すという視点

- ③性別、年齢、障害の有無、経済的事情、地域事情等にかかわらず、すべての人がスポーツにアクセスできるような社会の実現・機運の醸成を目指すという視点

この3つの新たな視点はスポーツの「出会い」と「縁」「繋がり」から生まれ、「スポーツの価値」を享受し、誰もがスポーツを身近に感じられる「スポーツ文化」として醸成されることを期待したい。

◆スポーツ研究所の活動

2023年度専修大学スポーツ研究所(SUIS)の研究活動では、昨年同様に研究会は3回開催された。初参加の若井江利先生、3つのプロジェクトの相澤勝治先生と木村元彦所員、佐竹弘靖先生、平田大輔先生、そして前年度国内研究員の時任真一郎先から5つのテーマについて研究発表があり、それぞれの研究に対して活発な意見交換が行われ有意義な研究会となった。

研修会は昨年度同様、各グループに分かれて実施され、他大学や各所属との交流や意見交換から新たな知見や情報などがたくさん得られ、今後の研究所の発展に寄与することを改めて確信した。昨年度の研修会では専大北上高校とアクティブラーニングコーススポーツ専攻についての情報交換会を実施したが、今年度から吉田清司先生が中心と

なり、これらのカリキュラム内容および展開に対して各所員が授業と授業後の地域の講演会も実施し、次年度も引き続き協力する予定である。

社会貢献活動では、コロナ禍でしばらく実施できなかった実践公開講座「中高年の健康を考える」を再開、「子どもの“からだ”と“うごき”と“こころ”づくり教室」は昨年度から引き続き木村元彦所員が中心となり活発に活動している。また今年度は新しく狛江市教育委員会(柏原聖子教育長)と研究所がスポーツや教育分野に関する連携・包括協定を締結した。これまでも「狛江市スポーツ推進講演会」で佐竹弘靖先生が講師を務めている。締結後には親子向け講座「狛江スポーツフェスタ2023 -マイスポーツを見つけよう!-」、高齢者向け講座「専修大学の先生と行く!大人の知的好奇心ウォーキング」を開催した。齋藤実先生が中心となり各所員や体育会監督・コーチ、学生など多くの方々からの協力があり、それぞれ受講者の方々から好評を得ていた。「Anker川崎フロントタウン健康長寿フェスタ」では体育事務課の協力要請を受け、各所員が協力して体力や体組成、骨密度などの測定を実施、たくさんの市民が訪れた。

各団体の要請からでは、佐藤雅幸先生、齋藤実先生は野球殿堂博物館主催「野球で自由研究:スポーツや勉強もどんどん上達!『こ

ころ』をきたえる」と題して身近にあるモノを使いながら心(メンタル)をきたえるトレーニングプログラムを紹介している。神奈川県タレント発掘・育成事業「かながわジュニアチャレンジプロジェクト」において相澤勝治先生は「ジュニア期の特性・発育発達～トレーニングの意味について考える～」、柏木悠先生は「体力・運動能力測定～定期的に体力・運動能力測定をして、プログラム効果を検証～」の講師として参加し活躍、継続して活動している。他にも所員の方々は多岐にわたる社会貢献活動を個人的に行っており、感謝の念に堪えない。

来年度は2024パリオリンピック・パラリンピックが開催される。さまざまなドラマが生まれるスポーツ最大の祭典はスポーツオタクには待ち遠しい。国際情勢は不安定な状況にあるが、アスリートたちが様々な困難を克服した努力や感動的なシーンが世界に伝わる。異なる国々や文化が交わり、互いの違いを認め合い国際社会においての平和や理解を促進し、「スポーツのチカラ」で社会にポジティブな変化をもたらして欲しい。研究所では来年度開催予定のシンポジウムは、パリオリパラから「スポーツの持つチカラ」をテーマのひとつとして含め開催したいと勝手ながら期待している。



専修大学スポーツ研究所

佐藤 満	佐藤 雅幸	吉田 清司
佐竹 弘靖	飯田 義明	齋藤 実
渡辺 英次	平田 大輔	富川 理充
時任真一郎	李 宇諤	相澤 勝治
柏木 悠	若井 江利	

専修大学スポーツ研究所報 2023

令和6年3月31日
監修 佐藤 満
編集 柏木 悠
発行者 平田 大輔
発行所 専修大学スポーツ研究所
〒214-8580
神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
電話・ファクシミリ 044-911-1032
E-Mail sports@isc.senshu-u.ac.jp
デザイン 山岸淳デザイン(株)